

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 11 日現在

機関番号：37409
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2010～2011 年度
 課題番号：22720122
 研究課題名(和文) 第一次大戦期の英国における国家イデオロギーの形成と作家による教育テキストとの関係
 研究課題名(英文) Formation of National Ideologies through the Textbooks by British Novelists in the Era of the Great War
 研究代表者
 岩井 学 (IWAI Gaku)
 熊本保健科学大学・保健科学部・准教授
 研究者番号：70369859

研究成果の概要(和文)：

R・キップリング『少年少女イギリスの歴史』(R. Kipling, *A School History of England* 1911年、C・R・L・フレッチャーとの共著)、G・K・チェスタートン『イギリス小史』(G. K. Chesterton, *A Short History of England*, 1917年)といった作品を念頭に置きながら、D・H・ロレンスの『ヨーロッパ史のうねり』(D. H. Lawrence, *Movements in European History*)と、第一次世界大戦期の他のテキスト(“The Thimble,” “Wintry Peacock,” “The Blind Man,” “Tickets Please,” *The Ladybird* など)とのイデオロギー的相同性を中心に分析した。

研究成果の概要(英文)：

I primarily analysed ideological affinity between D. H. Lawrence's *Movements in European History* and his other texts written during the First World War (“The Thimble,” “Wintry Peacock,” “The Blind Man,” “Tickets Please,” *The Ladybird*), also comparing them to *A School History of England* by Rudyard Kipling, *A Short History of England* by G. K. Chesterton and *The Outline of History* by H. G. Wells.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2010 年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2011 年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,200,000 | 360,000 | 1,560,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：英文学

1. 研究開始当初の背景

D・H・ロレンス、H・G・ウェルズおよびJ・M・バリーといった作家たちによるテキストと、社会進化論、人種退化論、優生学といったイデオロギーの形成との関係を探るなかで、これら三者を含めた何人かの

イギリス作家が教科書を執筆していることに気づいた(D. H. Lawrence, *Movements in European History*, H. G. Wells, *The Outline of History*, J. M. Barrie, *Peter Pan and Wendy* school edition, etc.)。

そこでこれらの作家たちは、テキストを執

筆・編纂することで、このようなイデオロギーにどのようなスタンスを取っていたのか、またこの時期にテキストを書くということはどのような行為であったのかという点を明らかにしようと考えた。

2. 研究の目的

イギリスの作家たちによる教育用テキストを、第一次大戦に直面した際に形成されていった国家観およびナショナリズムを視野に入れ、教育という観点から光を当てることで、国民国家のアイデンティティおよびナショナリズムのイデオロギー形成と文学テキストとの関係を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 大戦前の社会進化論、優生学、人種退化論により形成された国家観、および第一次大戦中から戦後にかけての国家のあり方を巡る議論を踏まえた上で、これまでマイナー視されていた教育用テキストとフィクションに光を当てる。

(2) 中心的に取り上げる作家は D. H. Lawrence と J. M. Barrie である。ロレンスに関しては、これまでの研究で得られた成果をもとに、*Movements in European History* と第一次大戦中に執筆されたフィクション (“The Thimble,” “Wintry Peacock,” “The Blind Man,” “Tickets Please,” *The Ladybird*) とを比較し、分析をおこなった。

(3) バリーに関しては、1911 年に出版された *Peter and Wendy* が、大戦中の 1915 年に、どのような経緯で学校用テキストに編纂されたのかを調査し、ナショナリズムとの関わりを分析した。具体的には、1911 version と 1915 version との異同を踏まえ、① Yale University, Beinecke Library において、1913 年から 1916 年にかけてのバリーの書簡を調査する。② Oxford University Press にある、出版経緯が記されたファイル (OUP file) に当たり、1915 version の出版経緯を調査する。

4. 研究成果

(1) “The Thimble” には、*Movements* に見られた、大戦による社会浄化論が刻印されている。「大戦による浄化」が最も端的に現れているのは、帰還兵の描き方にあるといえる。この時期にイギリスで出版された小説に登

場する帰還兵の多くは、shell shock によって記憶を失っていたり、帰還したものの周囲になじめず孤立していく、といったパターンで描かれるのが一般的である。それに対しロレンスの短編では、戦争で負傷した兵士が、現実の人間関係や世界のあり方を変えようようなミステリアスな力を身にまとして戦場から帰還する、という形で提示される。

またそれと同時に、軍服姿の未来の夫を見るとダフネは自分が「取るに足りない、従順な」存在 (“insignificant and subservient”) になってしまい、一方、従軍前は「なよなよしていて決断力もなく、人の後ろをうろうろ付いていくような男」と記述されていたヘバーンには「男らしさ」が付与される。ヘバーンは「堂々とした、言ってみれば超然とした王のような態度」になり、そして「落ち着き払った完璧な男らしさと威厳」を身にまう。このように戦争を契機に男がたくましくなり女性は従順になる、という記述は、戦争を浄化装置と見る言説に表れる典型的な記述の一つといえる。

(2) “The Blind Man” にも、“The Thimble” 同様、*Movements* にも見られた、大戦による社会浄化論が刻印されている(大戦中のテキストを分析するため、1915 年のヴァージョンを用いた)。主人公モーリスは、戦争によって視力を失うが、現実の人間関係や世界のあり方を変えようようなミステリアスな力を身にまとして戦場から帰還する。また労働者階級の帰還兵に対する、中産階級の恐怖も暗示されている。

しかしながら、この物語は非常にあいまいな結末を迎える。それにより、このテキストは、戦争による浄化、人種退化、労働者階級に対する恐怖心といった、中産階級の支配的イデオロギーを追認する単純なテキストとはなっていない。

一方で、ヒーローでありながらマージンに追いやられているという、当時のイギリスの帰還兵が抱えていた特有の状況が描き出されている。主人公帰還兵は、戦場に赴かなかった者たちから疎外されており、この物語は、執筆中になされたロイド=ジョージの提唱と異なり、「英雄が住むにふさわしくない国」に住む帰還兵のアレゴリカルな物語となっているのである。

(3) “Tickets Please” は、これまで主にフェミニズムの観点、あるいはロレンスの伝記的事実からの解釈がなされてきたテキストで、大戦との関係から分析されることは少なかった。しかし女性車掌アニーのジョン・トマスに対する復讐を、戦地に向かわない健全な男性に女性たちが白い羽を渡して揶揄したことのアリュージョンと読めるよ

うに、このテキストにも、第一次大戦の時代背景が刻印されているのである。

例えば、アニーたち女性車掌が疑似軍隊として描写され、彼女たちの暴力性が、“tartar”という、ドイツ軍の野蛮性を当時示したタームと共に描かれる。ことから分かるように、女性たちのリンチの場面には、軍隊の持つ暴力性が暗示されている。

また、テキスト冒頭に見られるヴィクトリア時代風の文体、リンチの間の女性たちによる結婚要求など、いわゆる「新しい女たち」とは違い、テキストの女性たちは保守的な価値観を体現している。待合室での倒錯した求愛は、女性たちが選ぶのではなく、女性が男性から商品として選ばれるという、女性たちの貶められた社会的地位を示す。すなわちこのリンチの場面は、ヴィクトリア時代の家父長制社会に内包された暴力性の発露であることも暗示されている。

このように女性たちによるリンチの場面は二つの層からなり、一方では軍隊の持つ野蛮さが、もう一方ではヴィクトリア朝の伝統的価値に内包された暴力性が織り込まれている。テキストは、第一次世界大戦中に暴発した非人間性と狂気が、20世紀初頭に特有のものではなく、前世紀から英国社会に深く根付いていた現象であることを明らかにするのである。

(4) “Wintry Peacock” (1919年のヴァージョンを用いた) では、物語の舞台となるイギリス中部地方のTibleが、現代世界の垢にまだまみれていない牧歌的な集落として提示される。この語り手は、時に現実を美化しながら、また現実から目をそらしながら、古き良き時代の価値観を理想化し描いていく。語り手は主人公アルフレッドを、大自然の中にたたずむ孤独な、しかし英雄的な「冬の孔雀」として、ピクチャレスクの構図に収めようとする。戦前の価値観を体現しているこの語り手は、戦前の世界を彷彿とさせる既成の価値――すなわち田園趣味やヒロイズム――で戦後の世界を塗り固めてしまう。

しかしこの語り手の行為とは裏腹に、このテキストは、忍び寄る現代社会の影や帰還兵の惨めな姿など、虚飾に満ちたタブローには収め切れない部分があることを暗示し、それによって語り手のナラティブの虚偽性をほのめかし、また牧歌的世界の破綻を暗示する。

上記の研究を通して、以下の点が明らかになった。①ロレンスのテキストには、*Movements in European History* にも見られた、大戦時の思考の枠組みが、語りの構造、人物造形、使われているタームなどに現れている。②しかし *Movements* と異なりフィクションには、当時のイデオロギーによって見え

なくされていた問題点があぶり出されている。テキストは、威勢の良いナショナリズムによって隠蔽されていた、当時のイギリス社会の負の側面――階級間、性別間、戦闘員と非戦闘員の間、軋轢――を暴き出すのである。

この発表には国際学会でも好意的な評が寄せられ、論文は現在投稿審査中である。

(4) バリーに関しては、以下の研究をおこなった。① Yale University, Beinecke Library において、1913年から1916年にかけてのバリーの書簡を調査した。その結果、バリーの戦争に対する両義的な態度などが明らかになったが、*Peter Pan and Wendy* 1915 version に関する直接的言及は残念ながら見つからなかった。従って、1911年ヴァージョンから1915年ヴァージョンへの編纂に関して明確な結論はえられなかったが、バリー自身の関与は比較的少ないのではないかと推測される。

② Oxford University Press に保管されていることになっている、出版経緯が記されたファイル (OUP file) に関しては、Oxford University Press に問い合わせたものの、その所在が明らかにならなかったため、調査することが出来なかった。現在は、Oxford University の tutor および他の知人を通して、OUP file の所在を調査中である。所在が分かり次第、調査を再開したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

Gaku Iwai, “History, Nationalism and the Great War in Lawrence’s Wartime Short Stories” (The 12th International D. H. Lawrence Conference 2011/06, Sydney)

岩井学、「第一次大戦をめぐるイデオロギーとロレンス中短編」(日本ロレンス協会第41回大会 2010.6, 早稲田大学)

[図書] (計2件)

岩井学 (共著)、『ロレンスへの旅』(2012/03) 松柏社、275-309.

岩井学 (共著)、『ロレンス研究――旅と異郷――』(2010/07) 朝日出版社、225-76.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩井 学 (IWAI Gaku)
熊本保健科学大学・保健科学部・
共通教育センター・准教授

研究者番号 : 70369859